テキスト抜け、SSのトリミングや貼付位置の甘さがありますがご容赦願います。

FF14　備忘ログ(PATCH2.2)　蛮族ストーリークエスト

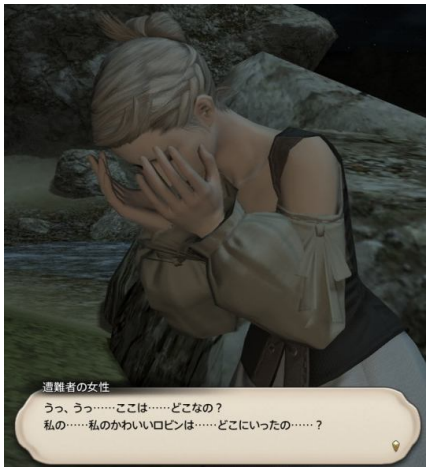
サハギン　編

©2010－2014 SQUARE ENIX CO.,LTD.All Rights Reserved. FINAL FANTASY XIV

深海より来たりしもの

ル・アシャ大甲佐 ： ああ、キミ、ちょうど良いところに！　あたしたちに、力を貸してくれない？
つい先程、軍令部に緊急の報せが届いたんだ。メルトール海峡を航海中の民間船が、蛮族の襲撃を受けて沈没したって！
すでに軍艦が救助に向かっているけど、生存者を発見できるかは、微妙な状況らしいんだ……。
海賊による船舶の襲撃、略奪はこれまでもあったけど、船ごと沈めるだなんて……ひどすぎるよ。
犯人はきっと海賊団「海蛇の舌」……　そして、奴らを操る蛮族、「サハギン族」だ！　あのサカナ野郎め……。
でも、今は生存者を一人でも多く助けるのが先だよ！　キミは東ラノシアの「ブラッドショア」に向かって、
漂着した遭難者がいないか捜索して！
現地には、あたしの部下も向かってる。まずは「ヴィルトファルク一等甲兵」と話して、救出の手筈を確認してほしい……頼んだよ！

ヴィルトファルク一等甲兵 ： ル・アシャ大甲佐に遣わされた冒険者さんですね？　自分は、ヴィルトファルク一等甲兵。
……ル・アシャ大甲佐率いる特殊陸戦隊の一員です。
……見てください、ごらんのとおりのありさまです。民間船は沖合で襲撃を受け、ほどなく沈没。
漂着した生存者は、わずか数名……ひどい状況です。



遭難者の女性 ： うっ、うっ……ここは……どこなの？　私の……私のかわいいロビンは……どこにいったの……？

ヴィルトファルク一等甲兵 ： ……奥さん、落ち着いてください。息子さんは目下、捜索中です。ですから、お気を確かに……。
冒険者さん……このご婦人のように、沈みゆく船から投げ出された乗客の中には、
運よく潮の流れに乗り、この海岸に漂着した生存者がいます。
海岸にいる遭難者を介抱し、救助の手助けをお願いします！　怪我人には、この「黒渦団の軍用薬」を使ってください。
私は、ご婦人を介抱していますので……。

疲れ切った遭難者 ： ……かはっ！　息が……息が……で、き……ない……っ。
げほっ！　はぁはぁはぁ……。た、助かった……ここはいったい……どこだ？　天国……じゃないよ……な。

疲れ切った遭難者 ： う……うう……　ぐはっ、げほっげほっ……！
はぁはぁ……俺は……助かった……のか？　問答無用で、いきなり船を沈めにくるなんて……
俺の長年の航海人生で……初めてだ……。

負傷した遭難者 ： ぐうっ！　か、肩の傷が……燃えるように熱いっ！　俺はこのまま死んじまう……の……か？
ぐっ、染みるぜ……。畜生！　あのサカナ野郎どもめ……　いきなり斬りかかってきやがった……！

負傷した遭難者 ： ぐっ……岩礁に背中をぶつけて……　ち、血が……力が……抜けていく……。
あ、ありがとう……助かった……。突然、轟音とともに船が傾いたと思ったら……襲ってきたんだ。
海賊と……サカナのような異形の蛮族どもが……。

ヴィルトファルクー等甲兵 ： 漂着した怪我人たちの介抱は終わったようですね。ありがとうございました、冒険者さん。
貴方のお陰で、被害を最小限に抑えることができました。
それにしても、憎むべきはサハギン族……。軍艦ならともかく、無抵抗の民間船を沈めるなんて、
まさしく鬼畜の所業……血も涙もない蛮族どもだ！

遭難者の女性 ： うっ、うっ……ロビン……。私のかわいい……ロビン……。

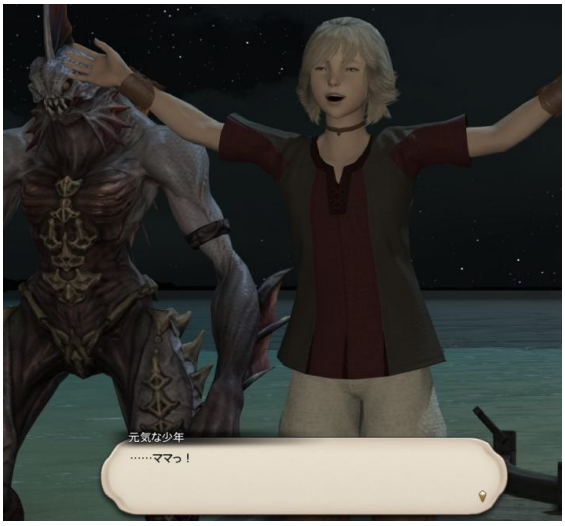
ヴィルトファルクー等甲兵 ： ……奥さん、胸中お察しいたします。おつらいでしょうが、お気を確かに……。
……むっ！？
こ、こんなところにまで……　サハギン族だとっ！？

サハギン族たち ： フスィーッ……　……フスィーッ。

ヴィルトファルクー等甲兵 ： 貴様ら、何用だっ！？　船を沈めるだけでは飽き足らず、とどめを刺しにきたか！？　どこまで卑劣で外道な……サカナ野郎めッ！

サハギン族の戦士 ： フスィーッ……。

元気な少年 ： ……ママっ！



遭難者の女性 ： ロ、ロビン……！　ロビンなのっ……！？

ロビン ： ママっ！　……ママーっ！！

遭難者の女性 ： ロビン！　ああ、生きていたのね！　よかった……本当に……！

ヴィルトファルクー等甲兵 ： な、何なんだ！？　いったい、どうなってるんだ……！？

遭難者の女性 ： ああ……ロビン……本当によかった……　女神リムレーンのご加護ね……！

ロビン ： うん、ボク、もう平気だよ！　海の中でママとはなればなれになって、溺れたところを、サカナのオジサンに助けられたんだ！
あのね、あのサカナのオジサンたちは、悪いおサカナじゃないよ！
船に乗りこんできたおサカナさんとは、別のおサカナさんなの！
あっ！　そうだ、冒険者さん！　ボクのお願い、聞いてくれる？
この「銀鮫の牙飾り」が、ボクを乗せてくれた小舟に落ちてたんだ。これきっと、サカナのオジサンが大切にしている宝物だよ！
きっと今ごろサカナのオジサン、困ってると思うの。だからお願い、冒険者さん！
この「銀鮫の牙飾り」をオジサンに返してあげて！
サカナのオジサンは「西ラノシア」の方に帰っていったよ。きっとあっちの方に、オジサンのオウチがあると思うの。
「助けてくれてありがとう」って伝えてね！

ヴィルトファルクー等甲兵 ： サハギン族が子どもを救ったなんて……ありえない！　奴らは我らの宿敵、冷酷非情な蛮族のはず……。
……これは何かの策略なのでは！？

ロビン ： サカナのオジサンは、ぜったいに悪いヒトじゃないよ！　ボクを小舟に乗せて、助けてくれたんだ！
……ちょっと生臭かったけどね、えへへ。

若きサハギン族 ： フスィーッ……何だお前は！？　ヒレナシが俺たちの育成地に何の用だ！？
帰れ、ヒレナシ！　ここは俺たちの土地だっ！
フスィーッ！　これはノォヴの親父が持っていた「銀鮫の牙飾り」じゃないか！　ヒレナシ、お前、どこでこれを……？
フスィーッ……なるほど……　子どもを助けた礼がしたいんだな？
お前、ヒレナシのクセに、なかなか殊勝な真似をする奴だな。
フスィーッ、中に入るがいい。ヒレナシの子どもを助けたのは、「ノォヴ」という。
この育成地の長……そして俺たちの親父だ。

ノォヴ ： フスィーッ……ヒトがこの育成地にやってくるとは。……なるほど、我らが助けたあのヒトの子の知り合いか。
私はノォヴ、この育成地の長であり、父でもある。
フスィーッ……ヒトの子を助けたことに、特別な理由などない。我らサハギン族は、血の絆を何より大切と考える。
「子は宝」……それはヒトもサハギンも変わらないだろう？
この育成地にいるサハギン族も皆、血の繋がった家族。全員が、この私の子どもたちだ。
なくした牙飾りをもってきてくれたのだな？　これは、我らが女王「蒼茫の母」に下賜された勲章……。
子どもたちの次に、私が大切にしていた宝物だ。
「一匹の魚の恩には、魚群の礼で報いよ」……　フスィーッ、私たちサハギン族の習わしだ。ゆえに私はお前を歓迎しよう。
なんなら、ささやかな酒宴を催してもいいぞ？　……もっとも、我らのもてなしが、
ヒトであるお前の口に合うものかは知らないがな、フスィーッ。

まほろばの血族

ノォヴ ： フスィーッ……そうか、お前もメルトール海峡で沈没した、民間船の乗客を救助していたのか。
……あの船を沈めたのは、確かにサハギン族だ。
あれは「珊瑚の銛」の仕業……。この先にある「サブサ産卵地」に棲む一味。
サハギン族の中でも過激な一派で、危険な思想をもつ連中だ。
我らも「珊瑚の銛」の凶行を事前に阻止すべく、奴らの足取りを追っていたのだが……フスィーッ。
わずかに到らず、今回このような悲劇をもたらしてしまった。
フスィーッ……我らか？　我らはこの「ノォヴの育成地」に暮らす「ノォヴ一味」。
サブサ産卵地から離れ、自主独立を保って生活している。
お前たちヒトがどうかは知らぬが、サハギン族は、家長たる父を頂点に血族単位で暮らす。
勇を示し、一人前の戦士と認められたサハギン族は、唯一無二なる女王「蒼茫の母」より、卵を受け賜る。
そして、子を成し逞しく育てるのだ……。
フスィーッ……しかし、それには「蒼茫の母」が、安心して卵を産むことのできる「産卵地」が必要……。
ゆえに、我らはこの地に来た。
……だが、「サブサ産卵地」は争いの要因となった。然るに、◇◇◇よ。お前のように、我らを恐れぬヒトが、我らと……。

セェウ ： フスィーッ！　親父、大変だ！

ノォヴ ： フスィーッ……騒がしいぞ、セェウ。サハギン族の戦士は、いついかなるときも心に波を立てるな。
そう、いつも訓じておろう。

セェウ ： す、すまねぇ、親父……フスィーッ。でも弟が……下から六番目の弟、ピュウが！

ノォヴ ： フスィーッ……ピュウがどうした？

セェウ ： フスィーッ！　ピュウが勝手に、育成地を出ていっちまったんだ……！
あいつ、きっと「珊瑚の銛」と話をつけにいったに違いない！

ノォヴ ： 愚か者め……フスィーッ。まだウロコも軟い稚魚の分際で……！　……ええい、今はここを離れることができぬというのに……。
フスィーッ……客人よ、頼みを聞いてもらえぬか。……どうか、息子を連れ戻してもらいたい。
詳しい話はそこにいる私の息子、セェウに聞いてくれるか。

セェウ ： フスィーッ、さっきの話は聞いてたろ？　この育成地に棲んでいる俺の弟、ピュウがいなくなった。
……きっと「珊瑚の銛」に会いに行ったんだ。
あいつ、まだガキのくせに無茶しやがって。「珊瑚の銛」の連中と、話し合いなんかできる訳ないってのに！
このままじゃ殺されちまう……。
フスィーッ、親父は連中から育成地を守るため、ここを離れられないってのに、面倒なことになったぜ……。
……そういや、あんた、ヒレナシだけど強いらしいな。
フスィーッ……頼む、ピュウを無事に育成地に連れ戻してくれ。恐らくまだ遠くには行ってない……きっとハーフストーン、
北防波壁の近くにある「サハギン軍陣営」の近くにいるだろう。

ハーフストーン・クロウ ： フスィーッ……なんだてめぇは！？　邪魔すんな！

ハーフストーン・スケール ： フスィーッ……ヒレナシめ！　関係ねぇ奴は、ひっこんでろっ！

ピュウ ： フスィーッ……まさかヒレナシに助けられるとは……　親父に合わせる顔がないぜ……フスィーッ……。
えっ……？　セェウの兄貴に言われて来た？
フスィーッ……「珊瑚の銛」の奴らめ……。あいつら顔を見るなり、いきなり殴りかかってきやがって！
まるで話が通じない……ホントに乱暴な連中だ！
「対話こそが理解への潮流」……親父はいつも、そんなこと言ってるけど、
やっぱ俺みたいなガキの言葉は、ナメられるだけなんだな……。
フスィーッ……親父、怒ってるだろうなぁ……　大手柄を立てて、兄貴たちをアッと言わせたかったのに……
ゲンコツ、痛いだろうなぁ……フスィーッ……。

ノォヴ ： フスィーッ……戻ってきてくれたか。身内の恥を晒してしまい、まことにお恥ずかしい限りだ。
ピュウには、きつく叱って言い聞かせよう。
実は我らサハギン族は、緩やかな絶滅の危機にある。我らの根拠地は、大いなる海「蒼茫洋」。
同胞の多くは、深海の都で安らかに暮らしている。
しかし、子孫を残す時には陸にあがる。「産卵地」で卵を産み、「育成地」で子を育てるために……。
これは我らサハギン族の生態、もはや覆せぬ生の営みだ。
先の霊災により、我らの産卵地は壊滅的な打撃を受けた……。だから我々は、仕方なくこの地に入植してきたのだ。
……お前たちヒトが「西ラノシア」と呼ぶ、この地に。
フスィーッ……お前たちにとってみれば、我らは突然、領土を蹂躙しにきた侵略者だろう。
しかし、我らにとって陸地の確保は、まさに死活問題。
この地を追われれば、我らは子を成し得ず、一族は滅ぶ。だからこそ……私はヒトと争いたくはない。
共存共栄の潮流を、模索したいのだ！
だが「珊瑚の銛」の連中は、それを理解せん。奴らは「海蛇の舌」のようにヒトを支配し、
逆らう者は皆殺しにするつもりなのだ……。
フスィーッ……私とて、ヒトが憎くないわけではない。水神「リヴァイアサン」様を召喚することも、
ヒトに水神信仰を伝え、テンパードと成すことも否定せん。
だが今の我らは、ヒトと争っている場合ではないのだ！　フスィーッ……次世代の子どものため。
サハギン族の種の繁栄のためにも……。
◇◇◇、お前の手が借りたい。サハギン族とヒトとの共存共栄の架け橋となるために。
そして、それを邪魔する「珊瑚の銛」を退けるために……！

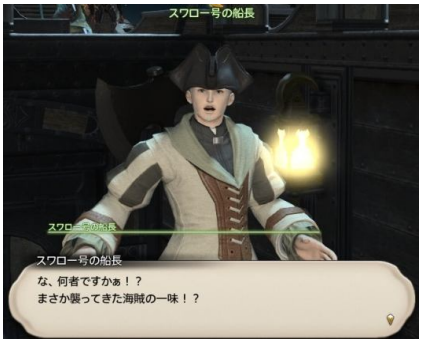
……いや、遠慮させてもらいます。
フスィーッ……そうか、残念だ。お前なら理解してもらえるものと信じていたが……。
フスィーッ……やはりヒトはヒト、立場が違えば道理も違うか。しかし、私はお前を非難したりはしない。
いつか再び、この育成地に戻ってくることを期待しているぞ。
フスィーッ……がんばりましょう！
よく言った、◇◇◇！　敵は「珊瑚の銛」だ！　奴らの凶行が続けば、
ヒトとの和解どころか、対話すら成し得ぬ状況となろう。
奴らの野望を水際で防ぎ、ヒトとの全面戦争を回避するのだ。フスィーッ……手を結び、共に戦おう。
絶望への戦いを防ぐ、希望のための戦いを……！

海魔の名は潮騒に乗って

ノォヴ　：　フスィーッ……◇◇◇、聞いてくれ。「珊瑚の銛」と、奴らに従う海賊団「海蛇の舌」が、
西ラノシアの沖合で、再びヒトの船を襲撃したらしい。
前回は奴らに後れをとり、まんまと船を沈められたが……　今回こそは、なんとしても阻止しなくてはならん。
フスィーッ……これ以上、ヒト勢力を刺激すれば、ヒトの長も黙ってはおるまい。
……このままでは、いよいよ全面戦争となろう！
フスィーッ……そうなる前に「珊瑚の銛」の愚挙を防ぐのだ。◇◇◇よ、急ぎ商船「スワロー号」に向かい、
「珊瑚の銛」の一味を退けてきてくれ。
我らは海を泳ぎ、海中の敵と対する。しかし、ヒレもエラも持たぬお前は、そうも行くまい。
我が息子、「海獣使いのパァア」の力を借りるがいい。
海獣使いのパァアの飼っている「エルブスト」は、ヒトを乗せて海洋を巡航できる、特別に訓練された個体だ。
フスィーッ……頼んだぞ！

海獣使いのパァア　：　フスィーッ……ノォヴの親父から話は聞いている。こいつは、俺が育てたエルブストでも、格別に強く大きい。
あんた程度なら、背中に乗せて外海に出ることができる。
「珊瑚の銛」は、「海蛇の舌」の海賊たちを従えるうえ、凶暴な戦闘用のエルブストを何匹も飼ってる。
敵は多勢、戦の準備は万全にして望めよ。
フスィーッ……俺のエルブストに乗って、沖合の商船「スワロー号」に向かうか？
フスィーッ……準備が整ったら、いつでも声をかけてくれ。俺のかわいいエルブストは、いつでも快調だぜ。

スワロー号の船長　：　な、何者ですかぁ！？　まさか襲ってきた海賊の一味！？
……えっ？　我々を助けに来てくれたのですって！？　船も無しでこんな沖合まで、いったいどうやって……。
いや、今はそんな話をしているべき時ではないですね。
私は、商船「スワロー号」の船長。……現在、乗組員たちに脱出用のボートを用意させているところです……。
……しかし、避難完了には、まだ時間がかかります。どうか、甲板にいる敵を討伐し、足止めをしてくれませんか！
どの敵でも構いません、とにかく数を減らしてください！



スワロー号の船長　：　足止めをしていただいたおかげで、こちらも準備完了です！　よくやってくれました、私たちも脱出しましょう！
……船を残すのは悔しいですが、魚の餌になるよりはマシです。
ひとまず、最寄りの港である「エールポート」に向かいます。現地の酒場でお会いしましょう！

スワロー号の船長 ： ……ああ、冒険者さん、ありがとうございました！　船を失ったのは残念ですが、船員と乗客が全員、
無事に生還できたことは、まさに不幸中の幸いでしたよ。
最近の民間船襲撃事件に用心し、万が一のことを考えて脱出用ボートを用意しておいて、本当に良かった。
備えあれば憂いなし……ですね。
しかし、こう頻繁に船が襲われちゃ、商売あがったりです。ここ最近の襲撃事件は、やはりすべて同一犯。
あいつら……サハギン族の一味の仕業です。
確か、奴らは自らを「珊瑚の銛」と名乗っていました……　自分たちは「紅珊瑚の海魔」に率いられた、
最強の海賊団だと……。

？？？？ ： な、何っ！？　べっ……「紅珊瑚の海魔」だ……と！？
ウルツ・コグルツ少甲士 ： ……失礼、小官はウルツ・コグルツ。このエールポートに駐留する黒渦団の少甲士だ。
船長、今の話は本当か？

スワロー号の船長 ： 今の話……というと……　船を襲ったのは、「紅珊瑚の海魔」という頭目に率いられた、
「珊瑚の銛」というサハギン族の一味だということですか？

ウルツ・コグルツ少甲士 ： そ、そんな……聞き間違いではなかったか……　「紅珊瑚の海魔」……馬鹿な……ッ！
奴が、再びこの海に現れたというのか……？

スワロー号の船長 ： 少甲士さん、何かご存知なんですか？

ウルツ・コグルツ少甲士 ： 15年前……西ラノシアを恐怖のどん底に叩き落とした、最凶最悪、冷酷非情のサハギン族の大海賊がいた。
首から提げた「白珊瑚」の首飾りが、ヒトの返り血により、「紅珊瑚」のように赤く染まっていたため、
ついた名が……「紅珊瑚の海魔」！
その名を聞けば、船乗りたちは舫を結ぶ手を震わせ、恐怖によって、心は時化の海のごとく荒れ狂う……。
当時のバラクーダ騎士でさえ、まるで歯が立たなかった……。
その名を久しく聞かなくなったため、てっきり死んだかと思っていたが……
なんということだ……奴め、生きていたのか……！
とにかく……これは重大な情報だ。キャンプ・スカルバレーのファルクブリダ中甲佐に報告し、
黒渦団として今後の対策を練ることにする！

スワロー号の船長 ： はぁ、そんな奴が現れたんじゃ……　命がいくつあっても足りないですよ。
……こりゃ、いよいよ廃業かなぁ。
ああ、冒険者さん、お礼がまだでしたね。……こんなものしかありませんが、良かったら、
この「極上のラノシアオレンジ」をもっていってください。
脱出の際に、持ち出せた商品はコレくらいでしてね。本当ならば、もっと冒険に役立つものを、差し上げたいのですが……。

ノォヴ ： ◇◇◇……。話は聞いた、よくぞ「珊瑚の銛」の野望を阻止してくれたな。
船は奴らに奪われたが、犠牲者を出さなかったのは大殊勲だ。
フスィーッ……うむ、この香りは？　それは、いったい……。
フスィーッ、これは何だ？　ほう、陸で採れる……果実か？　これまた珍妙な色だな。……お前たち、こっちへ来なさい。

ノォヴの幼子 ： フスィーッ……親父！　何だこれ？　食べ物？　丸くて、すっぱいイイ匂いがするぞ！

ノォヴの幼子 ： ……へぇ、「らのしあおれんじ」っていうの？　オニウツボの丸焼きと、どっちが美味しい！？

ノォヴ ： ◇◇◇の土産だ、ちゃんと礼を言え。フスィーッ……「おれんじ」は、後で皆で分けて食え。
不平不満がないよう、平等にな。

ノォヴの幼子 ： フスィーッ……！　ありがとう、◇◇◇！

ノォヴ ： フスィーッ……子どもはいい。奴らのためになら、私はこの命をいつでも捨てられる。
◇◇◇よ、お前に子どもはいないのか？
お前ほどの戦士であれば、女王から、さぞ多くの卵をもらっているのであろう？
フスィーッ……なんと、ヒトは卵を産まぬのか！？
フスィーッ……私もまだ知らぬことが多いようだ……。……だが、お前も我らのことは多くを知るまい。
例えば、件の「珊瑚の銛」のことだ。
奴らは「サプサ産卵地」内で、最近になって頭角を現してきた一団だ。
「海蛇の舌」を操り、戦場で多くの功績を挙げている。
奴らの頭目は……「紅珊瑚の海魔」……。……お前が聞いた情報は、間違いないのだな？
フスィーッ……分かった。我らも、あまりのんびりとはしていられないな……。
……この海に再び……「紅珊瑚の海魔」が現れたとなれば……。

わだつみに父は誓う

ノォヴ ： フスィーッ……◇◇◇。お前の腕をみこんで、折り入って頼みがある。
フスィーッ……私はこれから、大事な用があってな。しばらくこの地を留守にすることになる。
その間、お前は私に代わり育成地を見守ってほしいのだ。
特に子どもたちの面倒を見る必要はない。私がいなくとも、フュウ、ホォウ、セェウ、三人の長兄は、
弟たちを立派にまとめる力がある。
フスィーッ……私が懸念するのは「珊瑚の銛」の動向だ。我らの数々の妨害行為により、奴らの態度が硬化している。
いつ何時、育成地にその矛先が向けるやもしれん。

セェウ ： フスィーッ！　親父、どこに行くつもりだ？　大事な用とは、いったい何だ？

ノォヴ ： フスィーッ……セェウ。それをお前たちに言う必要はない。お前は弟たちを守れ……それが兄であるお前の本分だ。
フスィーッ……◇◇◇、留守は任せた。なに、用が済めばすぐに帰ってくる。くれぐれも、よろしく頼むぞ。

セェウ ： フスィーッ！　親父っ！

セェウ ： あの親父が、育成地を留守にするほどの用……　きっと血族の命運に関わる、大事な用事に違いない。
フスィーッ……親父の奴、勝手に抱えこんじまいやがって……。
フスィーッ……くそっ。俺たちは、一人前の戦士だってのに……　過去の戦いについてすら、教えてくれないんだ！
考えてみれば……俺たち、親父のことを何ひとつ知らねぇ……。親父の過去も、過去の戦いぶりも……。
フスィーッ……◇◇◇、頼む！　親父が言っていた用事っていうのは何なのか、
こっそりと調べて、教えてくれないか？
そういや、年配のサハギン族の中には、昔、親父に世話になった奴がいっぱいいるらしい。
「海還りの墓碑」や「船隠しの港」……それに「月影島」……。
あちこちにいるはずだから、話を聞いてきてくれ。「月影島」には、パァアのエルブストに乗れば行けるぜ。
……留守を任されなければ、俺が自分で行くんだがな。
そういや、お前はヒレナシか……きっと警戒されちまうな。この「ノォヴー味の印籠」をもってきな。
そうすれば、きっと相手も腹を割って話してくれると思うぜ。

海獣使いのパァア ： フスィーッ……俺のエルブストに乗って、「月影島」に向かうか？

老成したサハギン族 ： フスィーッ……ヒレナシめ！　ワシらをこの地から追い出しにきたのか！？　のかんぞ、のかんからなぁーっ！
フスィーッ……お前、ノォヴの知り合いか？　アイツ、ヒレナシどもと、つるんでおったのか！？
……だが、もうアイツの時代は終わったよ。
今は「ズゥグ」こそが、産卵地最高の戦士よ。あの高名な「紅珊瑚の海魔」の名を継ぐに相応しい男。
いずれヒレナシどもを皆殺しにする、偉大な英雄となるだろう！

老成したサハギン族 ： フスィーッ……ここはサハギン族の戦士たちが眠る場所。一族のために戦い、そして死んでいった者たちの
銛を祀る聖なる祭壇じゃ……。
この印は、ノォヴー味のもの……　フスィーッ……なんとノォヴの過去を知りたいとな……。
フスィーッ……あいつは……ノォヴは……　かつて「珊瑚の銛」を率いた一流の戦士での。
何よりも一族の繁栄を考える、偉大な男であったのじゃ。
この印籠は、奴の子どものものか？　フスィーッ……ホレ、帰ってその子に伝えんしゃい。
お前の親父は、誇らしい立派な男じゃとな……。

老成したサハギン族 ： フスィーッ……なんだ？　ヒレナシめ。「海蛇の舌」とやらの下っ端か？
フスィーッ……むむ……あんた、噂は聞いてるぞ。ノォヴの育成地に出入りしているヒレナシがいるとな。
……ノォヴの奴、いったい、何を考えておる？
そういえば、あやつは「珊瑚の銛」を率いている「ズゥグ」と「海蛇の巣穴」で会談の場を持つらしいが……
ワシは詳しくは知らん……これは返すぞ。

セェウ ： フスィーッ……どうだった？　親父に関する情報は聞けたか？
なるほど……フスィーッ……。親父はかつての「珊瑚の銛」の頭目だったのか……。
しかし、なんだって親父は、その立場を棄てたんだ？
……それに「珊瑚の銛」の頭目と、会談の場を持つだと？　フスィーッ……とてもじゃねぇが、話が通じるとは思えねぇ！
きっと奴らのことだ、卑怯な罠を仕掛けてるに違いねぇ！
フスィーッ……そうか、親父の奴……　俺たち子どもたちを巻きこまないために、
たった一人で向かったんだな？　はなから戦う覚悟で！
おいヒレナシ……いや、◇◇◇！　会談場所の「海蛇の巣穴」に潜入して様子をみてくれないか？
……そして、親父に何かあったら、助け出してほしい。
フスィーッ……俺だって駆けつけたい。だが、親父は俺たちに言った、弟たちを守れと……。
この役目だけは放り出せない……だから、親父を助けてくれ！
フスィーッ……「海蛇の巣穴」で行われる、親父と「珊瑚の銛」の会談に潜入するんだ！
親父を助け出せるのは、お前しかいねぇ……頼んだぞ！

珊瑚の銛の頭目 ： フスィーッ……来たかノォヴ。敵地にひとり、ノコノコとやってくるとは、
オマエも焼きが回ったか、ヒレ萎えの老いぼれめ。

ノォヴ ： フスィーッ……ズゥグ……。

ズゥグ ： フスィーッ……。オマエに、その名を呼ばれる筋合いはない！
俺のことは「紅珊瑚の海魔」と呼べ！　その名を聞けば誰もが戦慄する「珊瑚の銛」の頭目。
それが俺の名だ……フスィーッ！

ノォヴ ： フスィーッ……勘違いをするな、ズゥグ。私は、お前と戦いにきたのではない。話し合いをしにきたのだ。
ズゥグ、お前は考えたことがあるか？　我らサハギン族の行く末を……。
大洋に沈む夕陽のごとき、黄昏に生きる一族の未来を！？

ズゥグ ： フスィーッ……。フ、フフフフ……。
フハハハハハ！　フスィーッ！　フスィーッ！　オマエの口から、そんな言葉がでるとは……！
すっかりフヌけたようだな、ヒレ萎えめ！
かつてのオマエは、強く畏れられていたはずだ！　サメの牙より鋭く、エイの毒針より危険で、海蛇よりも獰猛！
蒼茫洋を震えあがらせた豪胆なる戦士！
その名も「紅珊瑚の海魔」のノォヴ！　フスィーッ！　とりもなおさず、オマエのことだ！　忘れたとは言わせねぇ！

ノォヴ ： フスィーッ……その名は、すでに捨てた。忘れたい過去とともにな。

ズゥグ ： フスィーッ！　だから、この俺が継いでやろうというのだっ！　「珊瑚の銛」を、ヒレナシどもの血で赤く染め、
ヤツらが隠れ棲む大地に突き刺してやる！
そう、産卵地がなければ、奪い取ればいいだけだ！　憎きヒレナシどもの血を吸った地にこそ、逞しい子が育つというものだ！

ノォヴ ： フスィーッ……　もはや、交渉の余地なし……か。
どうしてわからない、ズゥグ？　我らに今、必要なのは「闘争」ではなく「対話」なのだ。
つまらぬ意地で、子らを海の藻屑にするつもりか？

ズゥグ ： 海の藻屑になるのはオマエの方だ！　フスィーッ！　生きて帰すと思ったか、裏切り者め！
フスィーッ！　かかれっ！　背ビレをもぎとって、ウロコを全部剥いじまえっ！

珊瑚の銛の兵士 ： フスィーッ！

ノォヴ ： ……フスィィィーッ！！

珊瑚の銛の兵士 ： フ、フスィーッ……！？　こ、これが……真の「紅珊瑚の海魔」の気迫……！！

ズゥグ ： フスィーッ！　……チッ、ヒレ萎えどもが！！

ノォヴ ： ズゥグ、潮水に浸かって頭を冷やすがいい……フスィーッ。

ズゥグ ： フスィーッ……憶えておけ、ノォヴ！　俺は必ず、オマエを超える戦士になってみせる！
「紅珊瑚の海魔」の名は、俺にこそ相応しいのだっ！

ノォヴ ： ◇◇◇よ……。あいにく、お前の出番はなかったようだな。……お前をよこしたのは、セェウであろう？
フスィーッ……あいつめ。いつまでも幼いと思っていたが、賢しい真似を。……私は子に心配されるほど、衰えてはおらん。
フスィーッ……しかし、お前には礼を言おう。一足先に育成地に戻って待っているぞ。

ノォヴ ： フスィーッ……来たか、◇◇◇。待っていたぞ。……セェウもいるな？

セェウ ： フスィーッ……親父……。話って……何だ？

ノォヴ ： この育成地の皆には、今まで黙っていたが……。フスィーッ……真実を話すときが来たようだ。
お前たちには打ち明けよう、私の過去を……。
15年前……。私は「珊瑚の銛」を率い、この海域を荒らした海賊だった。
略奪、殺戮、人拐い……数え切れぬほどの悪事を働いた。ヒトはずいぶんと私を恐れただろう。
そして、ついた仇名が……「紅珊瑚の海魔」だ。
ヒトを殺し土地を奪う、すべてはサハギン族の未来のため……。当時の私は、その行為こそが正義だと信じ、疑わなかった。
フスィーッ……今の「珊瑚の銛」……ズゥグと同じようにな。
我らサハギン族は、勇者と認められた者だけが、女王「蒼茫の母」の産んだ卵を拝領することができる。
そして、孵った子の「父親」となる権利をあたえられる。
当時の私は、これでも一角の戦士であった。拝領した卵は百を超え、多くの子を成すことができた。
我が血族は、サハギン族の中で栄えるはずだったのだ。
フスィーッ……しかし……あの日……　15年前のあの日……　突然、悲劇はおきた。
いつものようにヒトの船を襲い、育成地に帰った私は、そこで……山のように積まれ、死に絶えた、我が子たちの死体を見たのだ……！
それはヒトの復讐……報復行為だった……。奴らは私の不在を狙い、育成地があった島を強襲し、我が子らを……皆殺しにした……。
フスィーッ……私は泣いた。大海を満たすほどの涙を流し……そして悟った。
我が子の死の原因は、この私……増長したこの私なのだと……。
憎しみは憎しみを呼ぶ……。そして、逃れられぬ渦を巻き、遂には奈落へと堕ちていく。
まるで海峡に逆巻く渦潮のごとく……。
その渦から逃れるべく、私は「紅珊瑚の海魔」の名を捨てた。わずかに残った卵をかかえ、育てることに専念したのだ。
セェウ、それがお前たちだ……。

セェウ ： フスィーッ……そんなことが……　親父っ……俺……やるぜ……死んだ兄弟のためにも……
絶対に「珊瑚の銛」の野望を食い止めてやる！

ノォヴ ： フスィーッ……◇◇◇よ。私がお前にかける希望を、理解してくれたか？
正直に言えば、私はお前たちヒトが憎い……！　しかし、たとえヒトといえど、私は決して憎んだりはしない。
憎しみを乗り越えた先に、我らが目指す真の共存があるのだ。
私にとっては、それこそが亡き子どもたちへの弔い……。だからこれからも、どうか私の力になってほしい。
フスィーッ……頼むぞ……◇◇◇！

憎しみの潮流を越えて

ノォヴ ： ◇◇◇……。フスィーッ、非常にマズいことになった……。ズゥグが……「珊瑚の銛」が、ついに強硬手段に出た……！
ズゥグも焦っているとみえる。またもや船舶を襲い、乗員を拉致したのだ。
フスィーッ……そして、連れ去った相手が問題だ。拉致されたのは、リムサ・ロミンサの高官……。
事態は、もはや政治的問題……。ただでさえ、水神「リヴァイアサン」様の召喚を巡り、
対立が激化する中での事件、全面戦争に発展しかねん！
フスィーッ……◇◇◇、頼む！　事態の収拾を図るため、ヒト勢力の関係者に話を聞き、
動向を調べ、あわよくば説得をお願いしたい！
ヒト勢力の拠点「キャンプ・スカルバレー」に行き、そこの責任者の話を聞いてくるのだ。
フスィーッ……頼んだぞ！

ファルクブリダ中甲佐 ： ……むっ、何用か。残念ながら現在、我々は緊急事態に対処している。
あいにく、貴公の相手をしている暇はないのだ。
「紅珊瑚の海魔」の率いるサハギン族に、リムサ・ロミンサ政府専用艦が襲われ、
乗り合わせていた「タースティン財務長官」が拉致された。
タースティン財務長官は、メルウィブ提督の信任厚き文官でリムサ・ロミンサの財政になくてはならぬ最重要人物……。
黒渦団の威信を懸け、全力で彼の救出に乗り出す！
なに？　ちょっと待てだと？　笑わせるな！　提督はすでにこの件について、蛮族の暴挙に屈しない、
断固たる報復の意思表明を各隊に通達済みだ。
黒渦団の主力を成す艦隊にも、出撃準備をせよとの号令が発せられている。
……覚悟しろ、サカナ野郎どもめ！　地図が書き変わるほどの艦砲射撃を食らわせてやる！
しかる後、我ら陸戦隊が奴らを掃討、蹂躙してみせよう！
……ええい、くどいぞ！　もはや交渉の余地などない！　長官を拉致した卑劣な蛮族にかける情けなどあるものか！
復讐するは我にあり！

ノォヴ ： フスィーッ……やはり……　もはや、ヒト勢力を止める術はない……か。
このままでは大きな戦いになる……　そして、どちらが勝とうとも、報復が報復を呼び、産卵地の確保などできなくなるだろう……。
フスィーッ……こうなれば最後の手段だ！　私とお前、2人でズゥグの野望を阻止する……　……それしかあるまい！
フスィーッ……◇◇◇。まず、捕虜となったヒトの要人を救出するため、捕らわれている居場所をつきとめる必要がある。
要人を拉致するほどの大掛かりな作戦……となれば、「珊瑚の銛」の奴らも、「海蛇の舌」を使っているだろう。
アジトの「海蛇の巣穴」に行けば、手がかりがあるやもしれん！
フスィーッ……頼むぞ、◇◇◇！　時は一刻を争う！

ノォヴ ： フスィーッ……◇◇◇、どうだ！？　何か手がかりはあったか？
これは「要人拉致計画書」か！　なるほど……要人は、「海蛇の舌」どもの海賊船、「ダッチェス号」に拘禁されているのか……！
フスィーッ……◇◇◇！　今すぐ「エルブスト」で計画書に記された海域に向かい、「ダッチェス号」へと乗りこむのだ！
私も準備が整い次第、後を追う！　フスィーッ……頼むぞ！

海獣使いのパァア ： フスィーッ……親父から話は聞いている！　もたもたするな、早く乗れ！

ノォヴ ： フスィーッ、ヒトの要人は私が守る！　お前は人質を解放するための「丈夫な手枷の鍵」を手に入れろ！
「珊瑚の銛」の兵長どもが持っているはずだ！

コーラルサハギン ： フスィーッ…俺が相手だ！　海の藻屑となるがいい…！
フスィーッ…ヒレナシめ！　水遊びはここまでだっ！

タースティン財務長官 ： サハギン族が……私を助けに来たというのか！？　どういうことだ？　い、いったい彼は……！？
た、助かった……ありがとう、恩に着る！　君は……冒険者か？　このサハギン族は……君の仲間なのか？

ノォヴ ： フスィーッ、まだ気を抜くな！　海に投げ出されぬよう、しっかりつかまっていろ！

ズゥグ ： フスィーッ……。やはりオマエを倒し、乗り越えなければ、真の「紅珊瑚の海魔」とは、なれんようだな……

ノォヴ ： フスィーッ……ズゥグ、無謀な真似を……！　そんなことをすれば、サハギン族すべてをまきこんだ、
ヒトとの全面戦争が始まるぞ！？

ズゥグ ： フスィーッ！　何を恐れている？　全盛期の「紅珊瑚の海魔」の所業に比べれば、稚魚の遊びのようなものさ！
フスィーッ！　覚悟しな、ヒレ萎えめ！　オマエの腕が鈍ってないか、この俺が確かめてやるっ！
ぐ、ぐはっ……！

ノォヴ ： フスィーッ……急所は外した……。帰って手当てをすることだ……！

ズゥグ ： フ、フスィーッ……く、おのれ……　哀れみなど……っ……！　殺せ！　殺せぇ！！

ノォヴ ： フスィーッ……子を殺す親がどこにいる？　我らサハギン族の血の絆は、海溝よりも深く、貝よりも固い……。
そうであろう、ズゥグ……？　我が息子よ……！

ズゥグ ： フ、フスィーッ……　俺は……アンタを……　親父だなんて……思ったことは……っ……！
フ、フスィーッ……何故だ……何故……？　アンタは……「紅珊瑚の海魔」の名を捨てちまった？
そして何故、ヒトへの復讐をしてくれなかったんだ！？

ノォヴ ： フスィーッ……。その答えを、お前はとうに知っているはずだ。
兄弟たちの無念を、忘れたわけはあるまい？　あの惨劇の場で、ただひとり生き残ったお前は、
死した兄弟の前で、私とともに滂沱の涙を流しただろう？

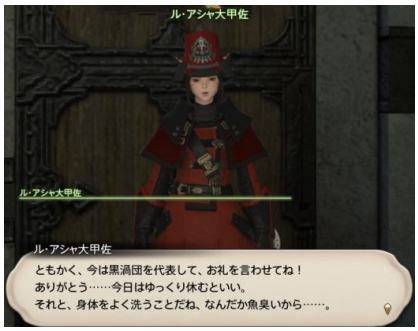
ズゥグ ： フスィーッ……　だからこそ……だからこそ……　俺は……強くなりたかったんだ……誰よりも……！
兄弟たちを殺したヒレナシどもに復讐するため……！　誰にも負けぬ、圧倒的な武力と畏怖……！
かつて「紅珊瑚の海魔」と呼ばれた……アンタのような……！

ノォヴ ： フスィーッ……　……名ひとつで、大切なものは守れない。その答えを知るために、私はあまりに多くを失い過ぎた……。
フスィーッ、ズゥグ、お前には……　お前には、そんな思いはさせたくないのだ。
なぜならお前は、サハギン族の未来を担う……私の息子。
私の……かけがえのない……「家族」だからだ……。

ズゥグ ： お、親父……。
フスィーッ……抜錨し……取舵をとれ。近場のヒレナシの港へ向かう。
それと小舟を一艘、用意しろ……人質を解放するぞ……！

タースティン財務長官 ： 冒険者よ、改めて礼を言おう……君は命の恩人だ。……そして、君とともに私を助けてくれた、
あのサハギン族の男にも……礼を言わねばならんな。
……私は今まで誤解していたようだ。サハギン族……蛮族は皆、血に飢えた殺戮者……。
交渉の余地などない、野蛮で残虐な連中だと。
しかし、あの男……ノォヴといったか。あのような一角の人物が、サハギン族にもいたとはな。
そして、蛮族も我々と同様、子を思う親の心を持っていた……。
……実は私も、3人の子を持つ父親でな。今回の件で、子どもたちには無用な心配をかけてしまった……。
早速、家に帰り、家族の安心した顔を見なくては。
メルウィブ提督にも、直ちに連絡を取り、黒渦団の各部隊への攻撃命令を解くように伝えよう。……それと、これを。
これはラノシアの船乗りたちに伝わる「海猫の羽根」だ。健康な発育と将来の栄達を祈り、父から子へ託す大事なお守り。
……これを、あのノォヴというサハギン族に渡してくれないか。
ヒトもサハギン族も、子を想う親の心は変わらない……。ははは、目からウロコが落ちた気分だよ。
……もう当分、ウロコは見たくないがな、はっはっは！

ノォヴ ： ◇◇◇、よくぞ戻った。お前には感謝の言葉もない……フスィーッ……。
ズゥグは「珊瑚の銛」を解散させ、旅に出るそうだ。アイツは息子たちの中でも一番、私に似て頑固な性分……
きっと、この育成地に帰るのを、ためらっているのだろう。
フスィーッ……しかし、アイツはいつか帰ってくる。きっと父親である私より強く、逞しくなってな……。
私はそれを楽しみに待ちながら、この地で暮らしていくつもりだ。
フスィーッ……これは……？　捕らわれたヒトの要人が……私に……？　……そうか……ヒトの父子の絆を結ぶ証……か。
私は大勢の子どもたちを、ヒトによって殺された。……その憎しみは、決して忘れぬだろう。
しかし、子を想う気持ちは、そんな憎しみとは比ぶべくもなく、大きい。
この「海猫の羽根」が、父と子だけでなく、ヒトとサハギン族……2つの種族の、
憎しみをも越える日がくることを……私は切に願っている。
フスィーッ……◇◇◇。旅立つ準備ができたのなら、行くがよい。……しかし、これだけは忘れるな。
この育成地で、お前と過ごした日々、数々の出来事を、私と私の子どもたちは決して忘れないだろう。
そして、お前が望むなら、我らはいつでもお前を歓迎しよう。
フスィーッ……何故なら……　お前もまた、私のかけがえのない「家族」だからだ……　……フスィーッ。



ル・アシャ大甲佐 ： おお、キミ！　よくぞ無事で帰ってきてくれたね！　タースティン財務長官救出作戦の後始末で、
軍令部はさっきまで、上を下への大騒ぎだったんだ！
でも、有事が未然に防げてよかったよ。もちろん黒渦団に、戦を臆する軟弱者はいないけど、
無駄な血が流れずに済んだことは、とても良いことさ！
それに、長官を救出したのは、キミだったんだって？　聞いたときは、ビックリしちゃったよ！
キミに任務を命じた、あたしの鼻も高いってもんだ！
おかげで、無用な戦いも避けられたし、何より長官も無事だったしね。
……だけど、蛮神「リヴァイアサン」の問題は残っている。和解への道を探りながらも、決して警戒は解かず、
万が一に備えないといけないね……。
ともかく、今は黒渦団を代表して、お礼を言わせてね！　ありがとう……今日はゆっくり休むといい。
それと、身体をよく洗うことだね、なんだか魚臭いから……。